

1993 年・・・『意識と知識』
 1994 年・・・『意識と知識・Ⅱ』
 1995 年・・・『知識は力』
 1996 年・・・『何を信じていいかわからない』
 1997 年・・・『懐疑心』
 1998 年・・・『科学・哲学と健康管理』
 1999 年・・・『科学と健康管理』
 2000 年・・・『科学とは』
 2001 年・・・『21世紀』
 2002 年・・・『学習とコレステロール』
 2003 年・・・『哲学のなぐさめ』
 2004 年・・・『遺伝子の時代』
 2005 年・・・『科学書と哲学書』
 2006 年・・・『新年』

現在、毎月お送りしている情報は1986年から隔月で始まり、1990年からは毎月お送りするようになり今回で 237回目となりました。上記のタイトルは1993年からの『新年号のタイトル』です（内容はホームページで御覧になれます）

『100年たっても腐らない情報は科学的なもの』
 『身体の問題、健康の問題はごまかしがきかない。それは科学の問題だからである』
 ということを恩師・三石巖先生に教えていただきました。

今年も科学的な健康情報をお伝えしたいと考えています。

.....

科学をする人は、「なぜ」「どうして」と考えている。
 ……人間は「なぜ」と思ってもすぐに忘れちゃう。
 あるいは、適当な説明を聞いて納得しちゃう。
 これじゃだめで、自分の頭にズーっと持っておくのが大事だと思います。

常識は大事なんだけど、邪魔するものなんです。
 不思議だなと思ったことは、ちゃんとした答が出るまでその質問を
 ずっと忘れないで下さい。その答が出ると、ものすごく嬉しい。

科学の一番の良いところは、いったんその味を覚えたら忘れないということです。
 答が分かった時の面白さ、それが発見であるわけです。

科学は自分が納得するかしらないかであって、誰だってできる。
 発見は回りの人が大事に思うかどうかではなく、自分にとって大事なら嬉しいんです。

…… 養老孟司氏の講演から

サイエンスとはもともと何かと言えば、ラテン語のscientiaで知識そのものを意味している
 scientiaは、scio（知る）の名詞形であり、
 サイエンスとは、本来、知ること全体、知識の総体を指しているのである。

…… 科学というものは、本来おもしろいものである。
 分かれば、こんな面白いものはない。何がどうなっているかを知りたいというのは、
 人間が生まれながらに持っている、どうしようもない本性であって、
 その本性につき動かされて出来上がったのが、科学という知の全体像なのだから、
 これが面白くなかろうはずはないのである。

もちろん分からなければ面白くないし、分からないものを分からなくても良いから
 とにかく覚えるというようなプレッシャーをかけられたら（一貫してそれをやってきたのが
 日本の科学教育ならぬ理科教育だった）面白かろうはずがない。

私は、ガイトンシュタインの「語りうるものはすべて明晰に語りうる」という言葉の信奉者で
 自分の特性は、難しいことを分かりやすく語ることにあると思って、
 この仕事を続けてきた。

…… 立花隆氏の著書から